

---

# こぼれた溜め息

シヤム

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

こぼれた溜め息

### 【Nコード】

N7521B

### 【作者名】

シヤム

### 【あらすじ】

大学の友人達と飲み会をすることになった隆司。彼は幼なじみで同じ大学に通う美樹に、ひそかな恋心を抱いているのだが、美樹と彼の親友は恋人同士で……

「ちょっと、隆司、聞いてよお」

俺の目の前に座っている幼なじみの美樹の口調は舌足らずなものとなり、目はとろんとしていて、頬はリンゴのように赤い。これは彼女が酔っている証拠である。

「ちょっと、美樹！ あんた飲み過ぎ！」

「飲まなきゃ、やって、らんないのお！」

隣に座っている友人の優香の言葉に耳を傾けることもせず、美樹はジョッキに残っていたビールを飲み干して、大声を上げながら優香を睨んだ。

今日は同じ大学に通う友人達と飲み会をしようということになり、大学の近くにある居酒屋に集まることになったのだが、酒に強くない美樹は案の定、すぐに酔っ払ってしまった。

「だって、だってさ、悠斗があ」

美樹の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

悠斗というのは、美樹の彼氏。そして彼は俺の親友でもある。俺を通して二人は知り合い、付き合い始めて三年経った今でも、同じ大学に通っていることもあってか、良好な関係を築いている。

生憎、急なバイトが入ったらしく、彼はこの場に来ていなかった。

「いつつも、バイトとか何とか言っていてさあ、あたしにい、全っ然、かまって、くれないんだも〜ん」

涙で潤んだ瞳をして、あひる口になりながら、こちらを見てくる美樹。正直に言つと、かなりかわいいと思う。

「まだ言ってる。しかたねえだろ。あいつの場合は事情が事情だし」  
俺は心の中に浮かんだ思いを悟られまいと、わざと突き放すような冷たい口調で話した。

悠斗の家は母子家庭で、彼が高校を卒業する頃、母親が重い病気を患って入院を余儀なくされた。入院費は保険で何とかならしだが、学費や生活費まで母親から、たかるわけにもいかなかったため、彼はほとんど毎日バイトをしているのだ。

そんなことは彼女である美樹も当然知っているのだが、

「でも、でもお、悠斗ったらあ、バイト増やしたのか、知らないけどお、最近、滅多に、会えないしい……」

美樹はそう言つては、優香の胸に顔をうずめて声を上げながら泣き始めた。

最近は大学でしか会えないと悠斗も言っていた。美樹が寂しいと思うのは分からはないが。

それから二言三言泣き叫んだ後、疲れたのか、美樹はそのまま眠ってしまった。

優香はやれやれといった表情をして、『あたし、もうすぐ門限だから、そろそろ帰るね』と言つた後、美樹が着ていた春物の柔らかそうなコートを、自分が座っていた場所に敷いて、そつと美樹の

頭をその上に置き、二、三度頭をなでた。美樹の寝顔が泣き顔から、安らかな笑顔へと変わった。

「悠斗、他に女でもできたのかな……?」

美樹の口から、そんなとんでもない言葉が零れたのは、飲み会に出ていたメンバーが解散することになり、俺が美樹を眠りの世界から無理矢理引きずり出してから、しばらく経ったときだった。

今、店に居るのは俺と美樹だけ。つまり、美樹の問いは、必然的に俺に向けられたものとなる。

「あいつにそんな器用な芸当できるわけねえだろ。お前の考えすぎ……」

「でも！ 最近全然会えないし、会えたって、いつも素っ気ない態度だし！ あたし、なんか不安で……」

俺の言葉が言い終わらないうちに、美樹は自分の思いをぶちまけ、視線をテーブルへ落とした。今にも再び泣き出しそうな顔をしている美樹。もう酔いは覚めたのか、口調はいつものようにハキハキとしている。

こぼれた溜め息

素面になっても、美樹は幼なじみの俺の前だけでは、いつも不安や悩みなんかを打ち明けてくれた。そんな些細なことでも、俺は嬉しいと感じてしまう。

「大丈夫だって。あいつはお前のことしか見てねえよ。お前あいつの彼女なんだからさ、あいつのことを信じてやれよ」

「隆司はいつも悠斗の味方なんだね。信じろとか言っちゃって……あたしの不安なんか全然分かってくれない」

『幼なじみより親友か』自嘲気味な笑みを浮かべて、美樹はぼそつと呟いた。

そんなことない、俺はお前のことしか……

「お前いい加減にしろよ！」

心に浮かんだ台詞を打ち消すように、俺の口からは怒鳴り声が零れ出る。

少し声が大きくなり過ぎたかもしれない。美樹の肩がぶるっと震えた。

「あいつに女ができたのどつだの言っつて、何なんだよ!? お前はあいつと別れたいのか!？」

「ち、違う! 別れたくなんかない! 悠斗とずっと一緒にいたい!」

少しどもりながらも、美樹ははっきりとそう言った。改めて、美樹本人の口から聞くと、やっぱりシヨツクだ……

「だったら、あいつのことを信じるしかないだろ。お前、言っつたじゃん。『あたしには悠斗が必要なんだ』って」

あいつがお前のことを必要としているように。

俺の言葉が穏やかなものになったためか、美樹は一瞬ほっとしたような表情を浮かべて、そしてぼろぼろと泣き出した。

「おいおい、泣くなよ。俺が泣かせたみたいだろ」

「だって隆司のせいだもん。隆司のせいで……」

美樹は涙を我慢することもせずに、ハンカチをびちゃびちゃに濡らしていく。

俺は隣に行つて、胸を貸したい思いをぐっと堪えて、ただ、泣きじゃくる美樹を見つめることしかできなかった。

「今日はありがとう。隆司に話して、なんか落ち着いたみたい」

店が閉店時刻になり、終電はすでに行つてしまったため、美樹はタクシーで、俺は歩いて帰ることにした。

「同じ方向だし、隆司も一緒に乗ればいいのに」

「金がねえんだよ。さっきの居酒屋に払ったのが、俺の全財産」

「お金なら、あたしが払うわよ。一人で帰っても、結局あたしが払うことになるから一緒のことじゃない」

「女に奢ってもらうのは、俺の性分に合わねえんだよ」

美樹が苦笑した、ちょうどその時、タクシーが俺達の前に滑り込んだ。美樹はもう一度『ありがとう』と言った後、タクシーと共に去っていった。

美樹はきつと俺のことを頼れる幼なじみとしか考えていない。俺が美樹に秘めた恋心を抱いているとは、夢にも思わないだろう。

「あーあ」

誰に聞かせるわけでもない、後悔が多少混じった溜め息を吐く。そして俺は、ある人物に電話を掛けることを思い付いた。

意外にも、その人物はワンコール目で出た。もつと時間がかかると思っていたのだが。

「もしもし、お前バイト終わった？ は？ 美樹を口説いたりしなかったかって？ 開口一番がそれかよ！」

なるほど、彼はそれが聞きたくて、すぐに電話に飛び付いたんだな。焦っているあいつの顔が頭に浮かんで、俺は思わず笑みを浮かべた。

「大丈夫だって。誰があんなめんどくせえ女……嘘です。美樹さんは大変すばらしい女性です、はい」

わざと美樹の悪口を言っと、案の定、あいつは怒鳴ってきやがった。本当に美樹のことが好きなんだな……

「そんなことよりさ。美樹のやつ今日泣いてたぞ。お前に会えなく

て寂しいって」

お前がバイト増やしたのかいけないんだぞ、とは言わない。俺は、あいつがどうして急に大金が必要になったのか知っているから。

「まあ、あいつへの誕生日プレゼントのためだから、しかたないけどな。確か……婚約指輪だっけ？」

それだけじゃない。夜景の見える高級レストランも予約したらしい。そこで苦労して買った指輪を出して、プロポーズをするのだろう。ロマンチストなあいつが好みそうなことだ。

婚約指輪。できれば聞きたくなかったその言葉。だって、美樹があいつからのプロポーズを受けるのは、ごく当前のことなのだからでも、

「まあ、頑張れよ。あいつの誕生日まで、あと一週間だからな。ん？ お前も早くいい女作れって？ 余計なお世話だったの。じゃあな、悠斗！」

これは俺が選んだことだから。俺じゃ美樹のことを幸福にはできないんだ。悠斗じゃなきゃだめなんだ。

「あーあ」

電話を切った後、さっきと同じような溜め息が零れる。違うのは後悔が少しも混じっていないということ。ただそれだけ。でもすごく大きいことだ。

いつかは忘れることができるだろう。この胸の痛みも、さっきから俺の目から零れ出している、この塩辛いきれいな水さえも。

こぼれた溜め息

都会の夜空は闇色で、星屑一つ浮かんでいない。それでも俺は祈

ってしまつんだ。

美樹と悠斗がいつまでも幸せでありますように

小さな白い光が、ビルの狭間を流れていったような、そんな気がした。

こぼれた溜め息

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7521b/>

---

こぼれた溜め息

2009年7月3日19時02分発行